

從軍慰安

明珍 美紀
(社会部)

日本人だからこたわる

し、わが国に謝罪と補償を求める。慰安所があったパナイ島で会ったトマサ・サリノグさん(みみ)は、「私をフタのように扱った日本人を思い出すと胸が張り裂けそうになる」と肩を震わせた。だが、意外だったのはその女性も、日本人の私を見る目に、

売ってまでやって来る。慰安所があったパナイ島で会ったトマサ・サリノグさん(みみ)は、「私をフタのように扱った日本人を思い出すと胸が張り裂けそうになる」と肩を震わせた。だが、意外だったのはその女性も、日本人の私を見る目に、

「ない」と思って過ぎてきたそうだ。三月二十三日の参院予算委員会で、河野洋平官房長官は韓国の被害女性から聞き取り調査をする事を明らかにした。慰安婦に対する「強制」の事実を認める方向だという。

これまで証言の信びよう性に疑問があるという理由で「聞き取り調査は行わない」としてい

「個人」にも配

しかし、補償問題については「すでに国家間条約で解決済み」との答えが返ってくる。慰安婦問題に詳しいノンフィクション作家の川田文子さんは「政府がこれで決着がついたとするなら、あ

パナイ島に11人に住むエルダス・デビナ・グラシアさん(みみ)のことを紹介したい。グラシアさんは戦争で置き去りにされた日本人孤児兄妹をずっと育てていた。それも自分を連行、監禁した日本の男性が妻との間に残した子供を。戦後、同国人の夫(故人)と結婚、六男一女をもうけたが「夫には日本の子供を拾った」と伝え、家族にもずっと事実を秘めてきたという。苦しい生活の中で、日本人の子供もわが子と隔てなく育てた。その日本人の子供が、一家の生活を支えている。

「私は命に代えて日本人の子供を守った。日本は戦争で被害を受けた我々に何をしてくれるのか」。グラシアさんはこう訴えた。

「日本政府に謝ってほしい。ただそれだけ」。東京地裁に提訴した在日韓国人の元慰安婦は、こう求めた。多くの資料が示している、強制連行の事実を認め、謝罪する。これがわが国がまずやらなければならないことだろう。

「触れてほしくない古傷」を作ったのは、たれでもない、日本人だ。だから私はこたわる。

「記者の目」を読んだ感想、ご意見を400字程度にまとめ毎日新聞本社記者の目担当へ。



「慰安所」に使われていたフィリピン・アンヘレスの中央銀行で、当時の写真を前に話してくれた原告の一人、ヘンソンさん

まず「強制」の事実認めよ

もあつた。

補償うやむやにせず

その一方で韓国政府は三月「日本に物質的補償は求めない」とする見解を打ち出し「道徳上の問題」として真相究明だけを求めている。しかし日本政府が、これを被害国の態度軟化と受け止め、補償問題もそのうちにならなくなるのではないかと

考えていたら大きな間違いだ。

原告の女性たちに会うため、フィリピンを訪ねた。最も感じたのは彼女たちは、とことんやるつもりだということだった。名乗り出た七十歳前後のおば

「日本人に対しては今でも恨みがある」

二年前の夏のことだ。韓国で初名乗りを上げた元慰安婦に会いにソウルに行った時、その女性はそのように思っていた。もちろん、私は戦争を知らない。けれ